

## 小規模多機能で支える高齢者の生活

### －住み慣れた自宅で自分らしく暮らしていきたい－

社会福祉法人こうれいきょう 小規模多機能ホーム三宿

小松 さやか、鈴木 正和、才木 浩也、長谷川 裕和

(小規模多機能 利用者本位 認知症ケア)

#### 1. 目的

小規模多機能型居宅介護とは、いったいどのような介護保険サービスなのか。またそのサービスを利用して利用者やその家族が住み慣れた自宅で自分らしく生活していく為には、具体的にどう支援をしていくのか。支援方法について実践事例を通して発表する。

#### 2. 実践内容

平成30年からサービス利用開始

一人暮らしの高齢者が他サービスを利用して生活していたが、ADLが低下してきたことで、支援方法を見直し、小規模多機能型居宅介護へ移行した。その方の支援を2年ほど続けているが、心身状況や生活状況が変化したことに伴い、小規模多機能ならではの方法で支援を柔軟に変更してきた。他のサービスでは実践しにくいこともあったが、小規模多機能ならではの（通い・訪問・泊り・相談）の複合的な視点から対応し、その時の状況にあった支援を提供した。また、今後も自立を基本に本人が住み慣れた自宅で安心して過ごせるよう環境を整えている。

#### 3. 結果

利用者の状況や生活に合わせて支援をすることが、本来の利用者の生活力の発揮につながるということが分かった。また、本人の気持ちや生活に寄り添って支援をしてきたことで、利用者との信頼関係が構築でき、緊急時の泊りの対応もスムーズに行えたことは、デイサービスでは難しいことであり、小規模多機能の良さでもあると実感した。利用者の生活に困難が生じたときに、利用者本位の支援が提供できることが、「自分らしさ」の継続につながると思われる。

#### 4. 考察と今後の課題

小規模多機能ならではの、柔軟で迅速なサービス提供、支援を活かし、利用者の状態を把握し、小さな変化にも気付けるようにすることが大切である。

引き続き、利用者・家族との信頼関係をしっかりと構築し、在宅での生活が安心、安全の上に成り立っていけるように支援をしていく。支援の方向を本人、家族と共有する、気持ちに寄り添っていくこと、認知症高齢者でも自立できる部分があることを職員一人一人が把握し、ケアに繋げていくことが非常に重要である。

今後の課題は、小規模多機能の可能性を広く周知すること。また一人暮らしの方や高齢者のみの方を中心に在宅で最期まで暮らせることが地域にとっても重要なことを理解してもらうこと。高齢者が在宅で最期まで生活するにあたっては、医療との連携や地域の方との協力も必要になってくる。それをどのように考えていくか、また看取りについても可能性を広げて考えていきたい。

